

成人期の注意欠如・多動症の時間処理障害に対する 集団認知行動療法プログラムの開発に関する研究

中島, 美鈴

<https://hdl.handle.net/2324/4059963>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (心理学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名 : 中島 美鈴

論 文 名 : 成人期の注意欠如・多動症の時間処理障害に対する集団認知行動療法プログラムの開発に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の研究は、成人期の注意欠如・多動症患者に対する集団認知行動療法の効果を最大化するために、時間管理プログラムを作成しその効果を実証したものである。また、その効果に影響する要因について検討し、治療者に求められる臨床スキル、プログラムの適用範囲、他の治療法との併用について検討を行った。

第1章では、成人期の注意欠如・多動症の心理的支援の概要と課題について文献的検討を行った。成人期の注意欠如・多動症患者に対しては、薬物療法とともに集団認知行動療法による支援が多く国際的な治療ガイドラインで推奨されている。しかし、患者は報酬遅延障害および不注意症状により、治療への動機付けの維持が困難であり、集団認知行動療法から多く脱落し、治療効果が限定的である。そこで本研究では、効果の最大化を図るため、治療者の臨床スキルなどの治療者要因、介入プログラムの内容や構造に関するプログラム要因、患者の属性や課題への取り組みなどの参加者要因、薬物療法などの他の治療要因がプログラム効果に与える影響について検討することを目的とした。これらの要因のうち、プログラム要因に関しては、注意欠如・多動症患者の多様な症状の中でも最も高度な実行機能に関連する時間処理障害が成人期の職業生活や家庭生活を大きく障害すると推察されること、小児への時間処理障害に焦点づけた介入例はあるものの成人期にはみられないことから、時間処理障害に焦点づけた成人期用のプログラムを作成することとした。

第2章では、治療者要因を検討するために、集団認知行動療法を実施する治療者の臨床スキルを測定する尺度（集団認知行動療法治療者評価尺度）を開発した。また、プログラム実施の様子を撮影したビデオを2名の評定者が尺度を用いて評定することで評定者一致率を求め、信頼性を検討した。また、初心者治療者およびケ上級者治療者の実施するビデオの評定点を比較することで弁別可能性を検討した。その結果、高い信頼性と、治療者の臨床技術を弁別する可能性が示された。

第3章では、プログラム要因に関して、成人期の患者の時間処理障害に焦点を当てた集団形式の介入プログラムを作成し、その効果を通常治療群を対照群とした無作為化比較試験にて検討した。その結果、患者本人だけでなく、同居の家族、臨床家評価によっても注意欠如・多動症の不注意や記憶の問題に関する症状を改善し、機能障害を改善していた。さらにそれらの効果は、プログラム終了2ヶ月後および6ヶ月後時点にも持続していた。時間管理の単独介入技法によっても脱落率が低く、効果の得られるプログラムを作成した。

第4章では、参加者要因およびその他の治療要因に関して、他の要因と合わせて効果への影響を検討した。その結果、注意欠如・多動症治療薬の服薬量が最小限よりは多い方が、治療者の巧みな集団認知行動療法の実施により促進されたホームワークの履行が多い方が、自己評価による不注意症状を改善していた。また、介入前の不注意症状の重症度が軽症である方が、自閉スペクトラム傾

向の少ない方が、自己評価による不注意症状が改善しやすいことが明らかになった。

第5章では、グループ参加者の事例を提示しさまざまな変化過程の様相を明らかにした。また、個別実施の事例も提示し、集団形式で行う意味について考察した。また、セラピストのホームワーク提供行動と参加者のホームワーク実施率との関連を事例にて検討した。

第6章では、以上の知見を、時間処理障害に焦点づけた視点から総合的に考察した。時間処理障害に焦点づけた介入は、小児期のみならず、成人期の患者に対しても有効であり、時間処理障害という単一の側面に焦点づけた介入によっても、従来の集団認知行動療法プログラムと同等の効果が得られ、患者の受講の身体的、時間的、医療経済的な負担を軽減する可能性を示唆した。また、時間処理障害に焦点づけた治療における変化過程として、心理教育やタイムログ等を用いた自己理解による客観視、時間管理に関する行動変容、家事や仕事における機能障害の改善、対人関係における機能障害の改善という順序であることが明らかになった。

以上のように、本論文の研究は、時間処理障害に焦点づけるという新しい視点から成人期のADHD患者に対する介入プログラムを開発したのみならず、その効果を多面的に実証した。